

# ドイツ人の東欧からの引揚げや故郷喪失をめぐる文学

永畑紗織

## 0. はじめに

東欧からのドイツ人の引揚げについての概況は、先ほど佐藤成基先生からお話しいただきましたので、こちらからは、ドイツ人の東欧からの引揚げや故郷喪失をめぐる文学についてお話しさせていただきます。<sup>1)</sup>

第二次世界大戦の敗戦により、ドイツは戦前の領土の4分の1を失いました。この時ソ連やポーランドに割譲することとなったオーデル川・ナイセ川以東の土地、具体的には、東プロイセン、ポンメルン、東ブランデンブルク、シュレージエン、オーバーシュレージエン等は、総称して東方領土と呼ばれます。これらの土地に住んでいたドイツ人たちの多くは、ソ連軍からの攻撃を恐れて1944年末頃からドイツ本国に避難し始めますが、終戦が確定した後もこれらの土地に残っていたドイツ人たちはソ連軍らによって追放されることとなります。(この時期には、東方領土のほか、チェコスロヴァキア、ユーゴスラビア、ハンガリー、ルーマニア等からもドイツ人追放が行われています。)逃亡の道は険しいもので、避難民たちのうち50万人ほどが、逃亡の過程で餓死したり病死したり凍死したり暴行を受けたりして亡くなりました。中東欧地域から逃亡して、あるいは終戦前後から1950年代初頭まで続いた追放によって移住を余儀なくされた者の数は、1400万人にのぼったとも言われます。この逃亡や追放という出来事は、当事者である東方避難民たちにとってはもちろん、彼らを受け入れる側であったドイツ本国の地元住民たちにとっても、大きな出来事でした。

終戦後、ドイツは東側と西側に分割占領されましたが、西側でも東側でも、終戦直後は被追放者たちの悲惨な様子は日常的に目にする光景であり、終戦直後に書かれたこのテーマにまつわる文学作品は、その窮状をストレートに伝えるものでした。例えば、終戦直後の1946年に書かれた、エーリヒ・ケストナー(1899-1974)の詩『1945年の行進曲(Marschlied 1945)』<sup>2)</sup>は、半年もの時間をかけてボロボロの姿でメーメル地方から逃れてきた女性の姿をストレートに描いたものですし、このテーマを扱うペーター・フーヘル(1903-1981)の詩『被追放者(Der Vertriebene)』<sup>3)</sup>やクレメンス・コンラート・レースラー(1896-1980)の詩『最初の宿(Erste Unterkunft)』<sup>4)</sup>は悲哀の色一色に染まっています。『最初の宿』を例にとってみましょう。

腰折れ屋根、暖炉はなく  
凍てつくような寒さ。  
外套が寝床の毛布代わり。  
靴は擦り切れ  
服はずたずた

そして空腹  
そして郷愁。  
そして死者への哀悼…  
一本だけのろうそくが  
部屋のあかり —

もやをあげて  
ゆらめく炎。  
一本だけのろうそくは、  
ちっぽけで滴を垂らしている  
私たちの涙のように…  
未来への  
私たちの希望の光。  
ああ、ろうそくが消えてしまったら！  
ああ、私たちから力がなくなってしまったら！

この詩のように、ただひたすら叙情的に悲惨さを描く作品は、その後は消えていくこととなります。西ドイツにせよ、東ドイツにせよ、完全なるタブーではなかったものの、時間の経過とともにこのテーマの扱いには慎重さを要求されるようになっていくからです。つまり、このテーマを扱う文学者たちは、国際社会の中でドイツが置かれている立場を意識せざるを得なくなっていくます。

東側と西側では、置かれている状況が大きく異なっておりましたので、ここからは、東側と西側に分けて見ていきたいと思えます。

### 1. 逃亡・追放・故郷喪失をめぐる東側の戦後文学<sup>5)</sup>

まずは東側の状況ですが、1949年末までにソビエト占領地区及びドイツ民主共和国、つまり東ドイツは、約400万人の東方避難民を受け入れました。これは当時の東ドイツの人口全体の25%にあたります。実に4人に1人の東ドイツ市民が東方からの避難民だったわけですが、被害者というニュアンスが感じられる「被追放者」や「避難民」という言葉を公に使うことは禁止されており、彼らは「移住者」と呼ばれていました。ドイツ人追放がソ連主導で行われたため、追放について語ることでそれ自体がソ連を敵視する行為とみなされタブー視されていたのです。4人に1人という非常に多くの「移住者」がいたにもかかわらず、「移住者」たちが自分たちの願望や利害関心、あるいは単に自分たちの経験を公に語ることは許されず、被追放者問題はタブー化されていきました。しかし、完全なるタブーだったわけではありません。東ドイツにも、東方からの逃亡・追放にまつわる文学作品は、数は少ないながらも存在していました。

例えば、アンナ・ゼーガース（1900-1983）は1950年にソビエト占領地区に住む東方避難民の生活を描いた『移住者（Die Umsiedlerin）』<sup>6)</sup>という短編を執筆しています。この短編は1953

年に発表されましたが、ゼーガースが被追放者問題を扱ったこの文学作品を発表することができたのには理由があります。この短編の主人公は、夫を戦争で亡くし、ふたりの子供を連れてロッセンという小さな村へと逃げてきたアンナ・ニートという女性です。彼女は避難先の村で、受け入れ人家族に疎んじられて肩身の狭い生活を余儀なくされますが、やがて共産党の助けでまともな住処と生活の喜びを手に入れます。アンナ・ゼーガースは、1928年に共産党員になり、1950年に自らの意志で西ベルリンから東ベルリンへ移り、東ドイツでは社会主義リアリズムの作品を書いた作家ですが、この短編は、まさにそのひとつと言えます。明白な社会主義賛美であるこの短編の場合、東ドイツで発表できたのも不思議はありません。逃亡そのものについては、「戦争末期、ポーランド人が移り住んできたときに、運命を共にするたくさんの仲間たちとともに、地元を離れ西へと移ってきた」<sup>7)</sup>と、非常にニュートラルに表現されていて、ソ連やポーランドへの政治的配慮も十分になされています。この作品からは、移住してきた見知らぬ土地に同化していくことがいかに困難であったか、そしてドイツ本国の地元住民にとっても戦後の貧困のなかで移住者を受け入れることはいかに大変なことであったかを知ることができます。

1956年にはハイナー・ミュラー（1929-1995）により『移住者あるいは田舎暮らし（*Die Umsiedlerin, oder, Das Leben auf dem Lande*）』<sup>8)</sup>という戯曲が執筆され、1961年に上演されています。この作品では逃亡・追放・故郷喪失といったテーマはさほど重要ではなく、土地改革や農業の集団化、東ドイツの地方住人の状況の描写に力点が置かれています。これらの描写の中に東ドイツ批判とみられる表現があったため、この作品は政府の干渉により上演が中止され、作者は作家同盟から除名処分を受けました。

1960年代には、ヨハネス・ボプロフスキー（1917-1965）が現在はロシア領となっている故郷への愛を密かに語る作品を数多く発表しました。詩人として文壇デビューした彼の最初の長編『レヴィンの水車（*Levins Mühle – 34 Sätze über meinen Großvater*）』<sup>9)</sup>（1964）は、1874年の西プロイセンにあるドイツ人やポーランド人、ユダヤ人やロマたちが暮らす小さな村を舞台にしています。現在はポーランド領となっている土地です。主人公である語り手の祖父ヨハンは、裕福なドイツ人で水車を所有しています。彼はユダヤ人レヴィンの水車小屋が儲かっているのが気に入らず、彼の水車小屋を壊してしまいます。裁判が行われるものの、レヴィンの敗訴に終わります。レヴィンはロマの恋人マリーとともに村を去ります。ヨハンの完全な勝利にもみえませんが、ヨハンは村に居心地の悪さを感じ、町へと引っ越すこととなります。この小説のなかで目につくのはドイツ人の横暴さです。ヨハンは自分には特権があると信じていて、好き勝手な振る舞いも許されると思っていますし、教会への資金援助が目的でヨハンに取り入ろうとする伝道師フェラーのような取り巻きもいます。ドイツ人であれば偉ぶることが許されるかのようです。この小説中のドイツ人たちは「ありとあらゆる財産を持って」<sup>10)</sup>いるとされ、物質的な欲望に囚われているようにみえます。例えば、葬儀に絹製の黒服を着て行けることが嬉しくてたまらない様子のヨハンの妻クリスティーナが描かれていたりします。他方で、この作品内では民族というものの曖昧さが繰り返し強調されています。「ドイツ人たちはカミンスキーとかトマシェフスキーだとかコサコフスキーとかいう名前で、ポーランド人の方はレープレヒトだのゲルマンだのという名前がついていた」<sup>11)</sup>という一文を読めば、民族というものが決して固定化されたものではないと作者が言おうとしていることが分かります。<sup>12)</sup>

ボブロフスキーは、ポーランド人の家系とドイツ人の家系が入り混じった家の出ですが、ドイツ語を母語とし、ドイツ文化のなかで成長し、ドイツ人として戦地に立った彼は、ドイツ人という加害者側の人間であるという自己認識を持っていました。他方で、名字からして東方を思わせる自分は、ドイツ人と東欧諸民族をつなぐような存在になるべきだと考えていました。

ボブロフスキーの作品が、失われた故郷をテーマとしながら東ドイツでも出版が許され、受け入れられたのは、ひとつにはドイツ人と東欧諸民族の融和を執筆テーマに掲げていたため、東欧諸国との友好関係を重視する東ドイツの政治と衝突しなかったからであり、また故郷喪失をドイツ人が犯した罪の当然の結果だという主張をしていたからだと考えられます。また、彼の作品は、牧歌的な印象を与えるものだったので、政治的に不穏な発言が隠されているように見られることはなかったのでしょう。ただ、実際には、彼の作品には東方領土（第二次世界大戦敗戦によりドイツ領ではなくなった旧ドイツ領）からの避難民たちの不満などの本音が描きこまれており、読む人が読めば、そのことに気づくこともあったと考えられるのですが、そういった不満は不明瞭な形でしか作品中に描かれなかったため、政府当局に目をつけられることなく、1965年に彼は生涯を閉じました。

1950年代・60年代に発表されたものでは、そのほかに、アルフレート・マトウシェの戯曲『村道（*Die Dorfstraße*）』（1955）、フランツ・フューマンの短編『海辺のボヘミア（*Böhmen am Meer*）』（1962）、ヒルデガルト・マリア・ラウフフスの小説『シュレージエンの天国（*Schlesisches Himmelreich*）』（1968）が、東方の故郷喪失を扱ったものと見なされていますが、4人に1人が東方避難民であるという東ドイツの状況に鑑みるに、このテーマを扱った東ドイツ文学は非常に少ないと言わざるを得ません。

東ドイツでは、1953年以降、移住者のための政策は一切なくなり、国家としては、逃亡・追放という出来事は、なかったことのように黙殺されるようになりました。同時に、ドイツ社会主義統一党書記長ヴァルター・ウルブリヒトの指導下で、東ドイツ文学は厳しい統制を受けていたため、1950年代・60年代の東ドイツでは、逃亡・追放を扱った文学作品が生まれにくい状況が続きました。しかしその後、ウルブリヒト体制からホーネッカー体制への移行の前後に、芸術や文学への規制がやや緩和されていくこととなります。また、東ドイツでは、自分たちの政権はナチスと戦ってきた反ファシズムによって樹立されたものであり、第二次世界大戦の際のナチス・ドイツの侵略行為やホロコーストに対する責任を負う立場にないという見解のもと、自分たちの罪としてナチス時代をみつめ、それを若い世代に伝える作業が十分にはなされてきませんでした。1970年代以降、文学の領域において、記憶の抑圧や忘却に抗いナチス時代という過去に取り組む動きが盛んになりました。

そのため、1970年代になると、1950年代・60年代には成立し得なかったような作品が誕生します。その例のひとつとして、1970年にエーリク・ノイチュ（1931-2013）によって書かれた『牧人（*Der Hirt*）』<sup>13)</sup>という小説が挙げられます。この小説は前線が近づいてくるのを恐れて東方領土から逃げ出すドイツ人の逃亡の過程を描いたもので、主人公はひとりの年老いた牧人です。餓死や凍死、戦線にぶつかる危険と隣り合わせで何カ月も徒歩で移動しなければならず、必死の思いでようやくベルリン郊外に辿り着いても、そこに喜びや安心や達成感が待っているわけではありません。そこにいるのは、無気力な顔をして横たわっている移住者たちの群れです。

逃亡・追放の過酷さがまざまざと伝わってくる作品です。この作品の中で最も注目すべきは、ソ連軍の飛行機によって無差別に行われた避難民たちへの爆撃のシーンです。

ソ連による残虐行為に言及することは、それまで避けられてきたため、この小説はタブー破りを行ったと言えなくもありません。ただし、攻撃してくる飛行機について、それがソ連の飛行機だとは書かれておらず、あくまで当時の戦況からソ連の飛行機と推測できるだけです。またこの小説中では、ドイツ兵たちの暴力性が強調されており、ソ連軍の残虐さよりはるかにドイツ軍の横暴さの方が際立っています。その意味で、ソ連をはじめとする東欧諸国との友好関係を何より重視する東ドイツ文学のスタンスはここでは破られていないと言えます。

完全なるタブー破りの先駆けと目されたのが、現在はポーランド領となっている東プロイセンのランツベルクで生まれ、自ら強制移住を経験したクリスタ・ヴォルフ（1929-2011）によって1976年に書かれた『幼年期の構図（*Kindheitsmuster*）』<sup>14</sup>です。「過去の克服」を主題とし、伝記的要素を孕むこの小説の中では、ナチス政権下で子供時代を過ごす「私」は三人称、現在の「私」は二人称、それらを物語る「私」は一人称で表現されています。かつて故郷であったポーランドの町を訪れる「あなた」は、ナチス政権下で過ごした子ども時代、当時受けた教育、そして故郷からの逃亡を回想し、過去のことを娘に語ります。それまでの東ドイツ文学が、ソ連をはじめとする東欧諸国の顔色を窺いながら書かれたものだったのに対し、この小説は、故郷からの移住を強いられた人々の心境を驚くほどストレートに描いています。例えば、「ロシア人はすべてのドイツ女性を暴行する。これは疑いない事実だ」<sup>15</sup>という文章だけをみても、ソ連との友好関係のために慎重に慎重を重ねてきた、それまでの東ドイツ文学とは異なっていることが分かります。また、逃亡・追放が東ドイツでは自由に語られてこなかったという事実に至り、言及がなされています。ただ、この小説は、ナチス時代の罪を若い世代に伝達する使命感をもって書かれたものであり、逃亡・追放は、この小説においては、戦争責任を負うドイツが体験した罪の代償として、盛り込まなければならないテーマのひとつでした。ここでは、東ドイツでは克服された過去として片付けられてきたナチス時代と向き合う試みの一環として、このテーマが扱われているのです。

1980年代には、ヘルガ・シュッツの『合唱教育（*Erziehung zum Chorgesang*）』（1981）や『アンナの名において（*In Annas Namen*）』（1987）、ウルズラ・ヘンチュの『われら難民の子（*Wir Flüchtlingskinder*）』（1985）など、より率直に逃亡・追放・故郷喪失を扱う作品が生まれました。1949年の段階で四人に一人が「移住者」であった状況に比べて、このテーマを扱った東ドイツの文学作品はごくわずかですが、国の規制の間隙を縫って書かれた諸作品は、必ずしもわかりやすく「被害」を訴えるものではないからこそ、かえって読者の胸を打つものとなっています。

## 2. 逃亡・追放・故郷喪失をめぐる西側の戦後文学

それでは次に西側のことに話を移したいと思います。西側占領地区及び西ドイツでは、東側に比べればはるかに大きな言論の自由がありましたが、それでもこのテーマは扱いづらいものとされてきました。人口の5人に1人が東方からの移住者という状況で、下手なことを言えば多くの人の反感を買う可能性がありました。また、昔の領土を取り返そうとしていると受け取



られたり、ナチス犯罪を相対化しようとする修正主義や報復主義であるとして批判されたりしないためには、慎重にならざるを得ませんでした。

また、国境線に対するスタンスは東西ドイツで決定的に違っていました。オーデル＝ナイセ線と呼ばれる、敗戦に伴ってドイツとポーランドの間に引かれた新しい国境線は、東側では1950年には既に正式な国境線として認められていたものの、西側で正式に承認されたのはようやく1990年のドイツ統一のときになってからのことでした。特に終戦直後から1955年頃までの間の西側占領地区と西ドイツでは、政府も住民の世論も、オーデル＝ナイセ線をドイツの国境として認めていませんでした。東方領土は回復すべきドイツ領であると考えられていたのです。オーデル＝ナイセ線を認めるということは、被追放者たちにとっては故郷を決定的に失うということであり、オーデル＝ナイセ線の承認に反対する声が止むことはありませんでした。

ですが、東欧諸国との友好関係を築くため、あるいはナチス時代を反省し新しく生まれ変わったドイツをアピールするためには、オーデル＝ナイセ線を受け入れる必要がありました。票田である被追放者団体の顔色を窺って政治家の間では表立っては言われることは少なかったものの、50年代半ばには既に東方領土の奪回は現実的には不可能だと考えられはじめ、オーデル＝ナイセ線問題を回避する傾向が強まっていきます。ドイツ人がヨーロッパの平和と和解に貢献するという使命を意識し、東方領土を放棄するに至るまでには、文学が果たしてきた役割は小さくありません。ここからは、西ドイツで書かれた逃亡・追放・故郷喪失をめぐる文学作品をみていきます。

クルト・イーレンフェルト(1901-1972)は、1951年に、「年代記」、「日記」、「対話」、「聖者伝」の四部で構成される『冬の雷雨(Wintergewitter)』<sup>16)</sup>という小説を執筆しました。第一部の「年代記」が、小説全体のほぼ半分を占めており、この部分では、1945年2月3日のニーダーシュレージェンの村で迫りくる前線に怯える村人たちの様子が描かれています。この日、この村に戦車や別の地域からの避難民たちがやってきたのを見聞きした村人たちは自分たちが間もなく故郷を去らなければならないことを悟ることとなります。「聖者伝」以外の3つの部分で中心に据えられている人物は、空襲で焼け出されてベルリンからこの村へとやってきた牧師です。この牧師は作者自身をモデルとしています。イーレンフェルトは、アルザスのコルマルで生まれた後、西プロイセンのブロンベルクで育ち、第一次世界大戦後、ポーランドへと割譲されたこの土地からの追放を経験しています。第二次世界大戦中には、ベルリンから焼け出された後、牧師をしていたシュレージェンの村から1945年2月に逃亡することとなります。この小説の中心テーマは神学的な問題です。ベルリンの家から焼け出された後、トラウマに苦しめられ、信仰に疑念を抱くようになる牧師の妻のほか、自殺によって不安と危険から逃れようとし、それがキリスト教的見地から許されるかどうかを牧師に問いかける幾人かの人物たちの姿が小説中に描かれています。そして「我々はみな罪を負っている、例外なく」<sup>17)</sup>とあるように、この小説の中では、戦争の脅威やドイツの敗北、目前に迫った逃亡は、他民族や神に対して犯した罪への罰だと捉えられています。

また、この小説中では他国批判と取られる可能性のある表現が避けられてはいないものの、諸民族の和解への希望がたびたびほめかされており、この小説は、追放した側を批判することを主たる目的とはしていません。基本的に、神を信仰する人間たちが故郷を喪失するよう

ことを神はなぜお許しになるのかという疑念に対する、自分たちの国・民族が罪を犯した以上何らかの犠牲が必要になるのだという答えに至るまでの思索の過程が、この作品のベースになっています。このような作品が、領土の喪失はナチス時代にドイツが犯した罪の代償だという戦後主流になっていく考え方を生み出すのに寄与しました。

ハイント・ピオンテック（1925-2003）は、自ら故郷喪失を体験したシュレーゲン生まれの作家で、1955年に『雪の下の土（*Erde unter dem Schnee*）』<sup>18)</sup>という短編を執筆しました。7年前の冬に家族とともに西へ逃亡してきた主人公が、通勤に使うバイクを欲しがっている息子のために故郷から連れてきた大切な馬を手放す際の顛末が、この短編には描かれています。無事に西へ移ることができたのはこの馬が最後まで頑張ってくれたおかげだという思いが彼らにはあり、ひとかたならぬ決意で馬を手放すことにしたわけですが、この決意をした背景には帰郷への諦めがあります。この短編の舞台となっているのは、おそらく1952年の西ドイツだと思われませんが、1952年の時点で、帰郷は現実的にはもう無理だと考えられ始めていたことが分かります。また、主人公一家が暮らしている家の家主である農民の「あんたたちが帰郷するまでにそんなに長くかかるだろうって俺は言ったか？ そうだとしたらまったくくまいましい罪だな」<sup>19)</sup>という台詞からは、追放は罪の代償であるという考え方が当時すでに一般的なものだったということが読み取れます。ただ逆に、この台詞は、当時はまだ帰郷が可能だと考えられていたことも明らかにしています。

馬を手放すということは故郷を思い出させるものを捨て去るということであり、この行為は、新しい土地で生きていこうという覚悟にほかなりません。基本的に悲愴感の漂う短編でありませんが、「雪の下に土をみつけない」<sup>20)</sup>や「鋤を持って働いたり、くわで耕したりする力がまだある限りは、人は繰り返す、何かを始めることができるのだ」<sup>21)</sup>という文にみられるように、この短編もまた、希望を持って新しい土地で生きていこうとする人間を描いています。東方領土への帰還は事実上不可能だという政治状況を受け入れ、新しい故郷にしっかりと根を下ろすべきときがきたことを、この短編は伝えています。故郷への帰還を断念する辛さを味わいながらも希望を持って新しい土地で生きていこうとする農民一家を描くことで、被追放者たちの共感と新しい故郷に根を下ろそうという決意を呼び覚まし得る作品となっています。

次に挙げるジークフリート・レンツ（1926-2014）の『郷土博物館（*Heimatmuseum*）』<sup>22)</sup>やギュンター・グラス（1927-2015）の『ブリキの太鼓（*Die Blechtrommel*）』<sup>23)</sup>は、逃亡・追放・失われた故郷をめぐる文学の代表作です。レンツは現在はポーランド領となっているマズーレン地方のリュクの生まれです。1955年に出版された短編集『ズライケンはこうも優しくった（*So zärtlich war Suleyken*）』<sup>24)</sup>で、初めて故郷というテーマを扱って以来、彼の作品には時折、このテーマが出てきます。彼が1978年に発表した小説『郷土博物館』は、故郷奪還目的に利用されるのを防ぐために、移住先で再建した博物館に放火する人物を描いた物語です。レンツは、東側諸国との関係改善を推し進めた連邦首相ヴィリー・ブラントを支持し、1970年の西ドイツとポーランドの国交正常化を取り決めた、オーデル＝ナイセ線の確認などを含むワルシャワ条約の調印の際には、ワルシャワに招待されてもいますが、こういった政治活動のためにオーデル＝ナイセ線反対派の人々からは激しい攻撃を受けました。『郷土博物館』は、これらの攻撃への反発から書かれたものだと考えられます。マズーレンを愛した人物の、愛しているがゆえの決

断の重さを突き付けるこの作品は、故郷喪失者たちの心を揺さぶるものだったのではないでしょうか。

次に、日本でもよく読まれているギュンター・グラスですが、映画化もされた彼の小説『ブリキの太鼓』は、大人の世界に嫌気がさして3歳で成長を止めた少年を主人公に、戦前・戦中・戦後の時代を描き、ナチスの暴走を助長させた一般の人々の罪を暴く作品です。『ブリキの太鼓』の戦前と戦中の舞台タンツィヒは作者グラスの故郷ですが、この作品からはダンツィヒに対する郷愁の念は感じられません。作者グラスのなかに、故郷を喪失したことへの心の痛みがないわけではないのですが、センチメンタルな気分にも溺れることへの警戒心が、彼の作品から郷愁の雰囲気も排除しているのです。彼は、清算し得ないドイツの罪を知らながら故郷奪還を叫ぶことは恥ずべきことだと考え、レンツと同様、東側諸国との関係改善を推し進めた連邦首相ヴェーリー・ブランドを支持し、オーデル＝ナイセ線の承認のために奔走しました。グラスは東西ドイツ統一後には、まず『鈴蛙の呼び声 (Unkenrufe)』<sup>25)</sup> (1992) を発表しています。オーデル＝ナイセ線が確定した後も、ドイツ人がポーランドを脅かす事態が起こり得る可能性を危惧した作品だと言えます。

2002年には、1万人のドイツ人避難民を乗せたヴィルヘルム・グストロフ号がソ連海軍の潜水艦からの攻撃を受けて9000人以上の避難民が亡くなった事件をテーマとして扱った『蟹の横歩き (Im Krebsgang)』<sup>26)</sup> が出版されました。この事件は、被害者としてのドイツについて語ることを避けてきた戦後のドイツではタブー視されてきましたが、この小説では、この事件をドイツを正当化する手段として用いようとするネオナチに焦点が当てられています。グラスがこの事件を取り上げたのは、語ることを避けてきたせいで事実が捻じ曲げられて利用されてしまう危険を指摘するためだと言えます。

レンツの作品もグラスの作品も、ドイツの罪の自覚がなければ生まれなかったと考えられます。これらの例から見て取れるように、言論の自由のあった西ドイツでも、逃亡・追放・故郷喪失を扱う上では、社会・政治情勢や読者に与える影響を無視することはできませんでした。文学は、被追放者たちに新しい土地で生きていく希望を与えたり、罪の代償として追放を捉える考え方を広めたりする役割を果たしてきました。国際社会におけるドイツの立場が意識され、他国批判は避けられました。もちろん逃亡・追放・故郷喪失を扱ったすべての文学作品が、このような方向性で書かれてきたわけではありませんが、東方領土放棄へ至る戦後のドイツで主流となる考え方に合うような文学作品こそが、高い評価を受けてきました。今のドイツの形ができるまでにドイツ人は多くの葛藤を経験してきましたが、その過程で西ドイツでは、実際に故郷喪失を経験した作家たちが、文学作品を通して東欧の故郷を愛しているがゆえに放棄するという道を作ってきたのです。

### 3. 日本の引揚げ文学とドイツの逃亡・追放・故郷喪失をめぐる文学の比較

最後に、上述のドイツの逃亡・追放・故郷追放をめぐる文学の置かれた状況あるいはその文学に描かれた状況と、朴裕河先生の『引揚げ文学論序説—新たなポストコロニアルへ』<sup>27)</sup> で概観された日本の引揚げ文学の置かれた状況あるいはその文学に描かれた状況を比較してみたい



と思います。

共通点としては、引揚げ者たちが引揚げ体験を語ることに積極的ではなかったことが挙げられます。新田次郎は、引揚げ者が引揚げの話を書きようとする理由として「嫌な思い出など誰だっ  
て忘れない」<sup>28)</sup>、「生きてきた者は多少なりとも死んだ人たちにすまないことをしているので、  
そういうことに触れられたくないのであろう」<sup>29)</sup>と述べています。被害体験であると同時に加  
害体験でもあるがゆえに引揚げ体験について語りづらいという状況は、ドイツの場合も同様で  
す。このような状況において引揚げ文学を生み出す作家たちの姿勢にも類似性がみられます。  
例えば、「『懐かしいと言ってはならぬ』として、甘い記憶と表現を極力抑制した」<sup>30)</sup>という小  
林勝の姿勢は、センチメンタルな気分には溺れることを警戒するグラスの姿勢と似ています。ま  
た引揚げ文学の受け取られ方にも、日本とドイツで似たところが見受けられます。「後藤明生が  
『内向の世代』とくくられていた」<sup>31)</sup>、「引揚げ文学が提示した政治的意味と問題がきちんと受け  
とめられることはなく、逆に『政治に無関心な世代の登場』といった枠組みでのみ捉えられて  
いた」<sup>32)</sup>と朴先生が指摘されているように、日本でも、引揚げ者が故郷について想起して書く  
ことは、過去の思い出に耽り現実をみないことのように受け取られがちだったようですが、ド  
イツでも同様のケースがみられます。例えば、ボプロフスキーは、「現代からは目を背け、とり  
わけ過去に根差し幻影的に見られる東方の風景を詩に詠んだ」<sup>33)</sup>、「我々の文学的議論の世界か  
らは距離を置いて、すっかり自分の世界へと引きこもり、自分の自我の消えゆく声に耳を傾け  
ている」<sup>34)</sup>などと評されていますし、ピオンテックも社会貢献を意図しない純然たるポエジーの  
代表者だと批判されたりしています。

他方で、日本とドイツのケースでは「内地とはどこなのかが比較的是っきりしていたか否か」  
という非常に大きな相違点があります。『引揚げ文学論序説』で、日本人植民者たちが自己を日  
本人として自覚する根拠として「本籍地」が重要な意味を持っていたということに言及があ  
りました。<sup>35)</sup> 日本国内に本籍地があることで、自らを日本人だと自覚するというわけです。  
つまり日本の場合は、どこが内地でどこが外地かというのが比較的是っきりしていて、しかも  
戦前と戦後であまり変わっていないわけですが、ドイツの場合は、どこまでが植民地でどこま  
でが元々のドイツ領と言えるのかが日本の場合よりはるかに不明瞭でした。というのは、日本  
が朝鮮や台湾を支配したのは数十年間のことであつたのに対し、ドイツ人は古くは13世紀から  
東方植民を行ってきたからです。日本の引揚げ者は、植民地で生まれ育った人は別として、自  
分の意志で自分の代で植民地へ移住したケースも多かったでしょうが、ドイツの場合は、もち  
ろんナチス時代の帝国拡大のために戦時中に移住した人もいたものの、何世代も前から同じ土  
地に住んでいたケースもたくさんありました。（ですので、今回のシンポジウムでは便宜上、「引  
揚げ」という言葉を使いましたが、「引揚げ」とは元いた所に戻ることでですので、ドイツの場合  
は「引揚げ」という言葉を使うのは妥当ではありません。）ドイツ人で先祖代々東方領土に住ん  
でいた人の場合は、むしろ自分たちは被害者だという意識を捨てにくく、日本の引揚げ者の場  
合は、自分たちは植民者である、つまり加害者側であるという認識がドイツに比べれば受け入  
れやすかったのではないのでしょうか。つまり、日本の場合は、国境線は最初からある程度クリ  
アで、植民地支配という罪の帰結としての引揚げという理解も、ドイツに比べればしやすかつ  
たわけですが、ドイツの場合はそうではなかったため、新しい国境線を受け入れる方向へ導い

たり、故郷喪失はドイツが犯した罪の帰結だと考える方向へ導いたりする役割を果たす文学作品が生まれたわけです。ドイツでは、引揚げ体験について語りづらい、あるいは語ることが許されない状況を打ち破って、重要な作品が生み出されていったのです。シンポジウムの席で小倉紀蔵先生から「日本はアメリカだけに支配されたので考え方がひとつであったのに対し、ドイツは国土が分断されたので考え方が分裂し、議論が多かった」というご指摘がありましたように、ドイツの場合は東方領土問題について議論せざるをえない状況がありました。日本の場合はドイツに比べれば、議論の必要性が認識されづらく、そのため、「引揚げ文学が提示した政治的意味と問題がきちんと受けとめられる」機会もないまま今に至っているのではないのでしょうか。

朴先生が「『植民地主義の意識の欠落』を作ってきたのはむしろ、それを見ること自体を怠ってきたからではないか。つまり、加害者の被害の問題を直視しなかったこと、被害に起因する恨みや憎悪についてまともに考えることなく抑圧してきたことこそが、差別や嫌悪といった、ある種の心理的『欠落』を作った遠因のひとつと考えられる」<sup>36)</sup>と指摘されていますが、ドイツでは、『蟹の横歩き』に見られるように、グラスのような世間からの注目度の高い作家が、加害者の被害の問題から目を背けることの危険性を認識し発信してきました。ドイツでも日本でも、植民地支配の問題については、どうしても自分たちを単なる加害者と捉える思考の単純化が起りがちですが、今回のシンポジウムでは、そのような単純化が捻じれや歪みを生むのだということを強く認識しました。ドイツでは、故郷喪失を経験し東方領土問題に積極的にかかわってきたレントとグラスが2014年と2015年に相次いで亡くなっています。つまり引揚げを直接経験した人々はどんどん亡くなっており、反対に被追放者連盟 (Bund der Vertriebenen) という故郷喪失者の利益を代表する団体が発言権を強めています。忘却に抗い、反動的な勢力に抗う新たな力が必要である今、生の体験として引揚げを知っている作家たちの作品が改めて読まれ、議論が深められる必要があると感じます。

## 注

- 1) 逃亡・追放をめぐる文学については以下の文献を参照した。*Flucht und Vertreibung in der deutschen Literatur*. Hrsg. von Feuchert, Sascha. Frankfurt am Main 2001; *Flucht und Vertreibung in der Literatur nach 1945*. Hrsg. von Kroll, Frank-Lothar. Berlin 1997; Helbig, Louis Ferdinand: *Der ungeheure Verlust. Flucht und Vertreibung in der deutschsprachigen Belletristik der Nachkriegszeit (Studien der Forschungsstelle Ostmitteleuropa an der Universität Dortmund. Bd.3)*. 3., um den aktuellen Forschungsstand und ein Register ergänzte Auflage. Wiesbaden 1996; Schaal, Björn: *Jenseits von Oder und Lethe. Flucht, Vertreibung und Heimatverlust in Erzähltexten nach 1945 (Günter Grass – Siegfried Lenz – Christa Wolf) (Schriftenreihe Literaturwissenschaft. Bd.75)*. Trier 2006; Schneiß, Wolfgang: *Flucht, Vertreibung und verlorene Heimat im früheren Ostdeutschland. Beispiele literarischer Bearbeitung (Europäische Hochschulschriften. Bd.1552. Reihe 1. Deutsche Sprache und Literatur)*. Frankfurt am Main u.a. 1996; *Täter als Opfer? Deutschsprachige Literatur zu Krieg und Vertreibung im 20. Jahrhundert*. Hrsg. von Hermes, Stefan und Muhić, Amir. Hamburg 2007; *Vertrieben... Literarische Zeugnisse von Flucht und Vertreibung. Eine Auswahl aus Romanen, Erzählungen, Gedichten, Tagebüchern und Zeichnungen der Jahre 1945-1985*. Gesammelt von Keil, Ernst-Edmund. Mit einem historischen Exkurs von Werner Rautenberg, Hans. Bonn 1985.
- 2) Kästner, Erich: *Wir sind so frei. Chanson, Kabarett, Kleine Prosa*. Hrsg. von Kurzke, Hermann in

- Zusammenarbeit mit Lena Kurzke. München 2004, S.52-54.
- 3) Huchel, Peter: P.H.: *Die Sternenreue*. München 1967, S.90.
  - 4) Rößler, Clemens Conrad: *Erste Unterkunft*. In: *Der Kulturwart*, 22.Jg., 1974, H.118. S.7.
  - 5) 逃亡・追放をめぐる DDR 文学については、特に以下の文献を参照した。Hartleb, Katja: *Flucht und Vertreibung. Ein Tabuthema in der DDR-Literatur?* Marburg 2011.
  - 6) Seghers, Anna: *Gesammelte Werke in Einzelausgaben. Bd.X: Erzählungen 1945-1951*. Berlin und Weimar 1981, S.272-279.
  - 7) Ebd., S.272.
  - 8) Müller, Heiner: *Die Umsiedlerin, oder, Das Leben auf dem Lande*. Berlin 1975.
  - 9) Bobrowski, Johannes: *Gesammelte Werke in sechs Bänden. Dritter Band*. Hrsg. von Haufe, Eberhard. Stuttgart 1999.
  - 10) Ebd., S.92.
  - 11) Ebd., S.10.
  - 12) 西成彦「多言語的な東欧と《ドイツ人》の文学」：高橋秀寿／西成彦 編『東欧の 20 世紀』人文書院 2006 年、181-210 頁所収、185-192 頁を参照。
  - 13) Neutsch, Erik: *Der Hirt*. In: *Heldenberichte. Erzählungen und kurze Prosa*. Berlin 1976, S.24-71.
  - 14) Wolf, Christa: *Werke. Bd.5*. Hrsg., kommentiert und mit einem Nachwort versehen von Hilzinger, Sonja. München 2000.
  - 15) Ebd., S.468.
  - 16) Ihlenfeld, Kurt: *Wintergewitter*. Wien 1979 [Berlin 1951].
  - 17) Ebd., S.801.
  - 18) Piontek, Heinz: *Erde unter dem Schnee*. In: *Klassische deutsche Kurzgeschichten*. Hrsg. von Bellmann, Werner. Stuttgart 2003, S.173-181.
  - 19) Ebd., S.177.
  - 20) Ebd., S.181.
  - 21) Ebd., S.181.
  - 22) Lenz, Siegfried: *Heimatmuseum*. München 1986.
  - 23) Grass, Günter: *Die Blechtrommel*. Darmstadt 1959.
  - 24) Lenz, Siegfried: *So zärtlich war Suleyken. Kurzgeschichten*. Hamburg 1955.
  - 25) Grass, Günter: *Unkenrufe*. Göttingen 1997.
  - 26) Grass, Günter: *Im Krebsgang*. München 2004.
  - 27) 朴裕河『引揚げ文学論序説—新たなポストコロニアルへ』人文書院 2016 年。
  - 28) 前掲書、96 頁。
  - 29) 前掲書、97 頁。
  - 30) 前掲書、50 頁。
  - 31) 前掲書、36 頁。
  - 32) 前掲書、36 頁。
  - 33) Hoefert, Sigfrid: *West-Östliches in der Lyrik Johannes Bobrowskis*. München 1966, S.1.
  - 34) Bienek, Horst: *Nachwort*. In: *Bobrowski, Johannes: Das Land Sarmatien. Gedichte*. München 1966, S.119.
  - 35) 『引揚げ文学論序説』、141 頁。
  - 36) 前掲書、99 頁。

